

福岡市

# 大牟田15号・43号墳発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第14集



福岡市教育委員会

1971



## 序 文

近年、福岡市および周辺地域の開発とともに、各種造成工事の激増は、はなはだしいものがあります。ここに報告します大牟田15、43号古墳もその例にもれず、宅地造成のために止むなく記録保存のため、緊急調査を実施したものです。

当委員会では、今後も文化財の保護と活用のため、努力する所存でありますので、市民各位の御協力をお願いいたします。本書が各位の郷土に対する認識と理解の資料として、御利用いただきますなら幸甚であります。

本遺跡を調査いただいた九州大学考古学研究室および関係各位に対して、深甚の謝意を表します。

昭和46年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 豊島 延治



## 調査関係者

調査員 松本 葉 佐田 茂(九大) 萩野知則 野田拓治(国学院大)

九州大学 鏡山 篤 国崎 敏(発掘担当者) 森貢次郎 小田富士雄

協力者 株式会社大林組 蜂谷工業株式会社 平山修一(宇土市教委)

教育委員会 豊島延治 大蔵富繁 青木 崇 清水義彦 石崎 博 岩下拓二 野上淳次

三宅安吉 山口俊二 下条信行 柿川純孝 塩屋勝利 折尾 学

田坂美代子 徳永照代 三島 格

(本書の作成には佐田茂・松本葉・三島格があたり、文章内容に関する責任は、佐田茂・松本葉が一切の責任を負うものである。)

## 目 次

I 調査にいたる経過	1	V 43号墳	6
II 調査の概要	1	1. 墳形	
III 地形と環境	2	2. 内部構造	
IV 15号墳	3	3. 出土遺物	
1. 墳形		VI むすび	8
2. 内部構造			

大字柏原字大牟田所在の古墳については、住生住宅株式会社により、既に調査がなされているが、ここに報告する第15・43号墳のみは西尾都久志氏個人の所有地であり、調査未了となっていたが、今回西尾氏から調査の申出があったので、造成に先立ち発掘調査を実施した。発掘期間7月15日～22日。

調査にあたって西尾氏、大林組、峰谷工業株式会社などの御援助を得た。明記して感謝の意を表す。

## II 調査の概要

大牟田古墳群は昨年度の調査によって、その大半が終了している。その結果、小尾根、丘陵上に合計42基の古墳が存在する一大群集墳地帯であることが既に明らかになっているしかも内部主体は全て横穴式石室である。そのうち41基は同一造成地内にあり、調査が完了しており、現在調査参加者の手によって銳意整理中であり、まもなく調査報告書が刊行されるであろう。

15号墳は小丘陵の尾根上に位置する当墳を南の住宅地から見ると顕著な盛り上がりをみせ、墳丘の規模は群集墳としては大きい方ではないが、大牟田古墳群の中では大きい部類にぞくする。

調査以前には石室の露出ではなく、最初、尾根に沿ってトレントを入れ、石室の検出をめざした。その結果、石室の掘り方に当たり、石室は南に寄っていることを知る。南側に拡張して石室の全貌を出してみると、石室は大部分破壊されており、わずかに玄室部分をとどめるのみであった。奥壁は腰石の半分、右側壁も二段残っているだけで、左側壁、羨道部は完全に消失していた。石室の破壊状態から、墳丘はもともともっと規模が大きく、南側が大きく削られていることがわかった。石室は花崗岩の風化してできた土壤の地山を掘り、石室を築き、その上に土を盛っている。

調査は1基の予定であったが、前回調査の古墳を確認するためのサーベイの途中新たに1基が発見され、群としては43基を数えるに至った。この古墳の処理をめぐって調査員の中で色々と論議したが、結局、当地における新たな調査はしないという市教育委員会の方針により、また緊急調査の性格上、やむを得ず調査を遂行した。

43号墳は1基だけ地形的には離れたところにある。谷に面した急傾斜面を切って横穴式石室を築くという方法をとっており、調査時においては墳丘はほとんど認められなかつた。

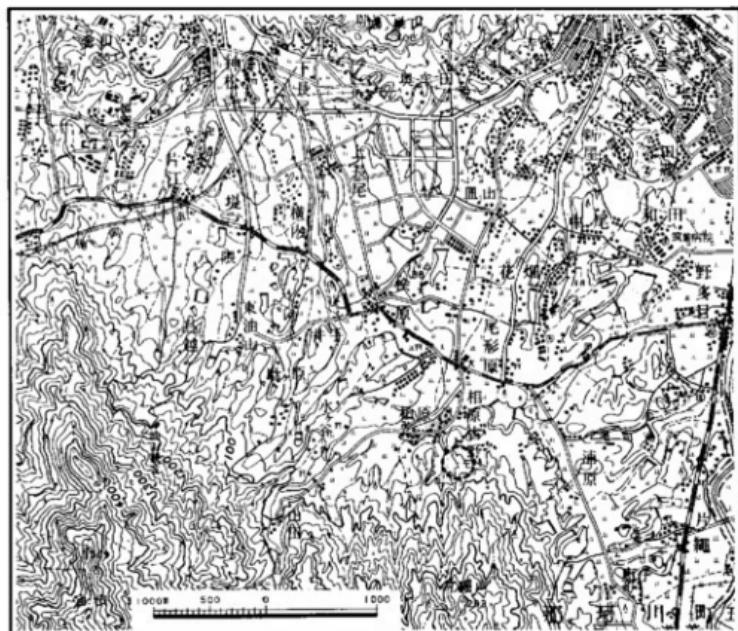
等高線にそって築かれた石室は小さく、方形の玄室に渋道がつづく簡単なものである。

43号墳の向かいに臺土状の痕跡を認めるところが2個所あったが、トレンチを入れた結果古墳ではないことがわかった。

### III 地形と環境

今回調査の対象となった、第15号・43号古墳は、全て小円墳により形成されている群集墳、大牟田古墳群43基中1つのにあたる。その地緒は福岡市大字柏原字大牟田に属し、福岡市街地の南にあたる。片廻山（標高 292.4m）から北流する丘陵上に位置している。西南方面には油山（標高 592m）、背振山（標高1055m）を擁し、東南方向には、九州の政庁跡である大宰府遺跡、また大野城址を望み、前方はるかに福岡平野、博多湾を見下ろす景勝の地にある。

当古墳群より東方2kmには、横口式堅穴石室を4基有する前方後円墳の老司古墳。また4kmの地点には、日拝塚古墳等の古墳をはじめとして、羽政遺跡、一の谷遺跡、伯玄社遺



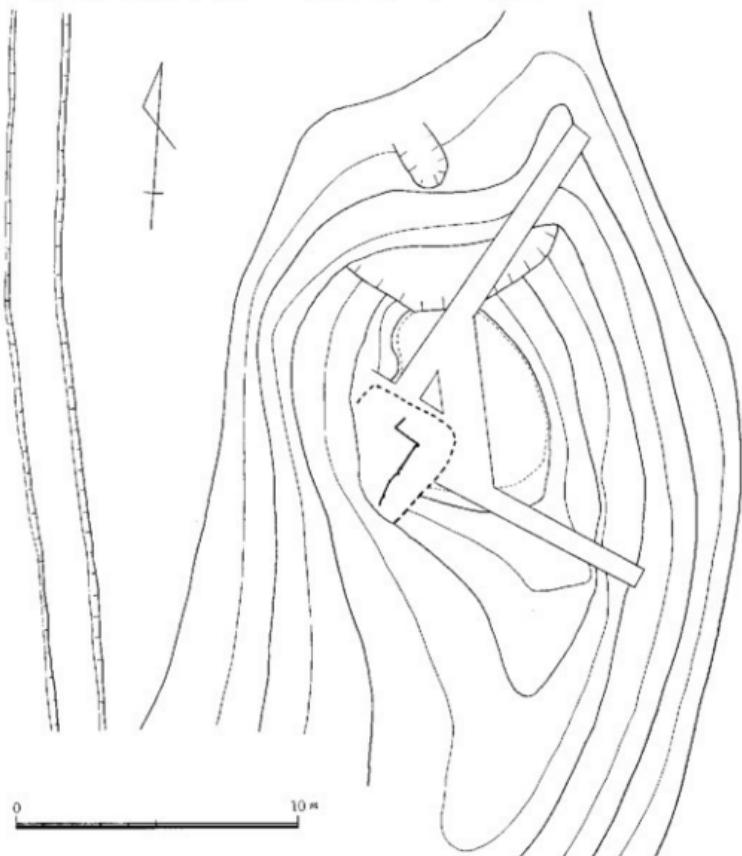
第1図 大牟田古墳群周辺図

跡等の弥生時代の遺跡も多く存在する。東南方向に目を転じると、福岡市と近接した筑紫郡那珂川町には、方形周溝墓が発見された、油田古墳群、炭焼古墳群の両古墳群を見ることが出来る。福岡平野を中心とした、いにしえの文化と、今日の社会生活とが一望のもとにみえる地にある。

#### IV 15号墳

##### 1 墳形（第2、3、4図）

舌状に伸びた丘陵の、標高63mの堤根上に築かれ、この古墳群の中でも最も大きな墳丘



第2図 15号古墳墳丘実測図



第3図 15号古墳東側トレンチ墳実測図



第4図 15号古墳北側トレンチ墳実測図

を有する円墳であり、墳径15mを計る。墳丘の高さは現高2.4mである。墳頂はほぼ5mの平坦面になっており、墳丘の西側及び南側が大きくえぐられている。このことより土取り作業等で、すでに破壊され、著しく原状が変更されていることが推定された。

まず封土の構成を見るために、墳丘のはば中心を交点として、残り方がよい北側及び南側に、それぞれトレンチを入れた。盛り土は、丘陵を形成している花崗岩が、風化して出きた土壌を地山として、その上に現在では2層の同質の土を盛り上げて墳丘としている。裾の部分で70~80cmしかこっておらず大部分切りとられていることがわかる。地山に石室を構築するための掘り方を1.3m程掘り込んで石室を作り、現在残っている石室の石組みの状態から考えても、石室の高さは2m程度であり、それほど盛り上をしたとも考えられず、築成当時は、あと50cm程度墳丘が高かったんじゃないだろうか。

周濠、葺石等の外部施設は皆無である。

## 2 内部構造(第5図)

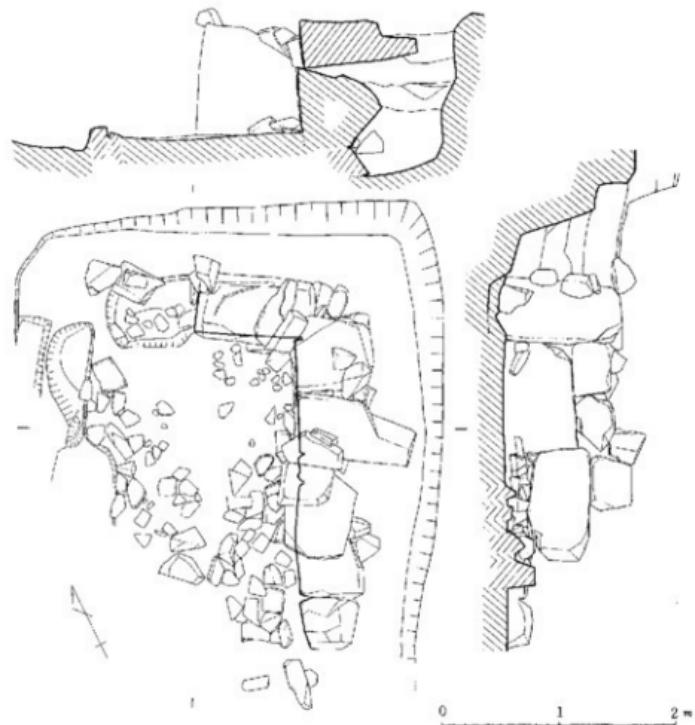
現墳丘の中央部よりも、西南よりに石室が発見されたが、著しい破壊により現存する石組みは、奥壁腰石一枚と、北側側壁腰石一段しかなく、石室の構造は不確である。しかし、奥壁と東側側壁とのぬきあとにより、幅約1.8m、奥行約2.7mの玄室を有する横穴式石室であると考えられる石室の主軸はN27°Eをとる。石材は、花崗岩を使用しており、この

丘陵よりたやすく手に入れることが出来る。

床面には、同質の石材の礫を多數検出したが大きさも不統一の上、あまりにも不規則であるが、もともと礫を撒きつめた床であったと思われる。

石室の構造は、地山を幅3.6m、長さ約4.5m、深さ1.3m掘り下げて堀り方を堀り、石材を立て、若干の根石を用いてはいるが、地山の土を積み込み、一応地山の高さと同一レベルで腰石の面をあわせた上で、石を積みあげていったと思われる。石室の高さは2m内外と推定されるので、地山より1m程度しか出ていないことになり填土はそれほど高くないことがわかる。

なお、盗掘ならびに破壊により遺物は検出されなかった。



第5図 15号古墳石室実測図

## V 43号墳

### 1 墳形

当墳は古墳群中一番東に位置している。南北に延びる尾根の東斜面にたゞ1基だけ存在する、群全体からみれば特異な位置を占める。

傾斜面は約40度の傾きをもっている。この傾斜面を切って、南に開口する横穴式石室を内部主体としているが、石室は等高線にそって構築されており、尾根側の側壁は上端が地表面と同じ高さと考えられる。このことから築造当時においても顕著な盛り土はなかったものと考える。

### 2 内部構造(第6図)

南に開口する横穴式石室は主軸をN29°Eにとる。石室の構造は当古墳群に通有のものである。石室は両袖式で全長は4.00mをはかる。方形プランの玄室は奥行1.85m、幅2.10m、羨道は長さ2.15m、幅1.10mで、玄門近くに仕切り石がある。

石積みの方法は玄室、羨道ともに腰石を使用し、その上に塊石を積み、間には小石を荒くつめている。

玄室床面には敷石があつたらしく、礎が奥壁と東壁の近くに若干のこっていた。

### 3 出土遺物(第7、8図)

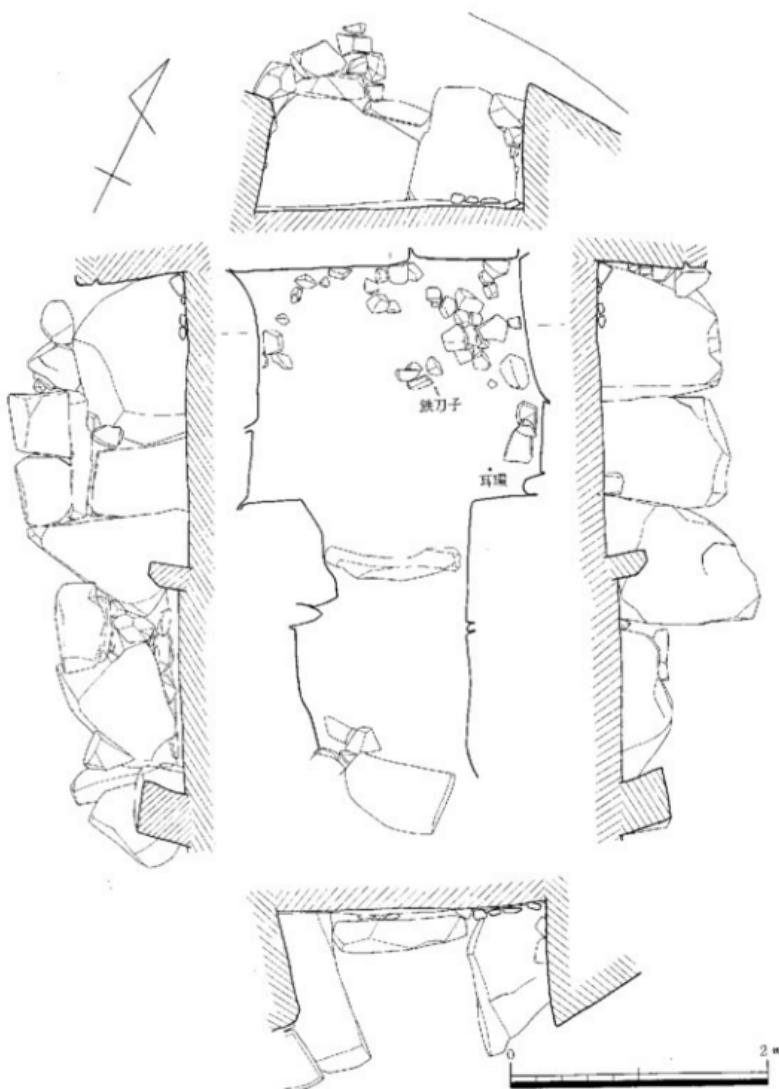
盗掘を受けているために、原位置をとどめているものは何らみられない。遺物の量は非常に少なく、耳環1、鉄釘2、鉄刀子1、須恵器甕の破片のみである。

耳環(第7図1)一部は欠損しているが、径3cmをはかる。環自身は大きく、断面は正円に近い橢円形を呈す。環は中空で銅環の上に鍍金をほどこしている。耳環としてはするどさがなく、中空であることから新しい時期のものということができる。

刀子(第7図4)は切先の部分を欠失しており、現存長は9.9cmである。茎の部分は長さ3.5cmで断面は長方形を呈し、端になるに従って細くなる。刀身部は現在6.4cmが残っており、断面は長三角形を呈する。幅は闊のところで1.2cm、切先の方で0.8cmである。切先になるに従って刃部が細くなっているが、これは使用による磨滅のためだと思われる。

鉄釘(第7図2、3)は2本出土しているが、うち1本には木質が付着している。断面が四角な釘で先が細くなっているが、長さは2が8.4cm、3が8.5cmでほとんど同じ長さである。頭は共に手钩状に曲がっているが、全体に3の方が穂がはっきりしていて、木質もこの釘に付着している。

須恵器甕(第8図)の破片は小片であるために器形、大きさについてわからぬのが、相当大きな甕である。色調は灰白色を呈し、焼成も割合良好である。器壁は内外面とも



第6図 大半田43号填石室実測図

叩き目で成形していて、外面は櫛目文、内面は青海波文である。ことに内面は同一箇所を何回も叩いており、弧が寸断されている。

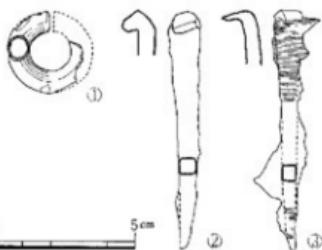
## VII むすび

大平田古墳群は小さな谷の入り込んだ山麓に群小墳が散存している状態である。それは地形的に幾つかの支群に分けることができる。巨視的には7~8の支群になるが、今回の調査では43基のうち2基を調査したのみであるから、分布上の問題については全体を包括した報告にゆずることにする。

15号墳は北西に延びる尾根上に位置し墳丘も顯著である。すこし下ると34号墳がある。一方43号墳は尾根の傾斜面をカットして築かれており、1基だけ独立したところにある。この2基は対象的な立地条件を占め、立地からだけ見ると、15号墳の方が若干築造が古いようである。

石室の規模はほとんど変わらないが、15号墳の玄室プランが長方形を呈するのに対し、43号墳は方形プランを示す。石室の構造は両墳とも同様であるが、15号墳の方が、石積みもしっかりしているし、壁面も整っているようだ。墳丘の状況については立地条件に左右されるせいか、低地のものに墳丘のしっかりしているものが多い。それと同時に石室の規模についても低地のものが若干大きく、構造がしっかりしている。

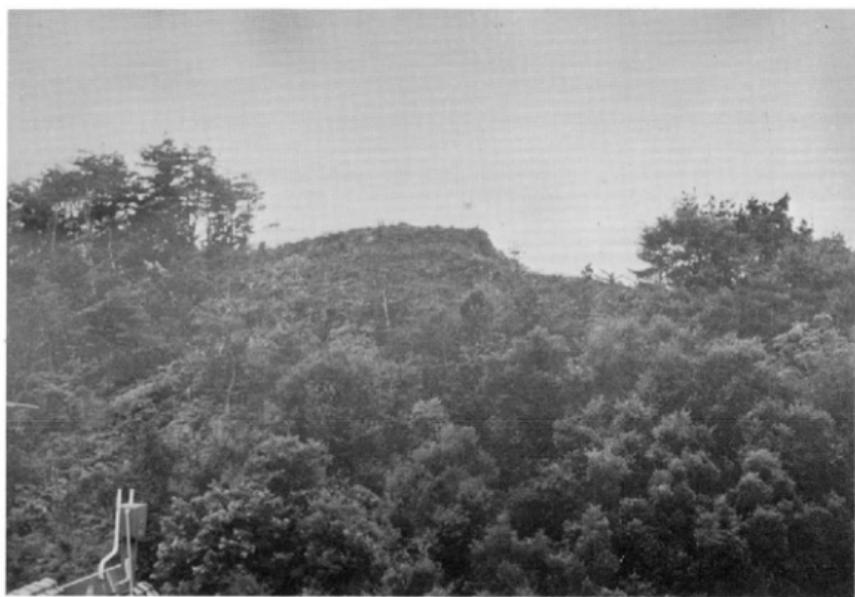
古墳の築造年代についてであるが、出土遺物が少なく確定的なことはいえない。15号墳は遺物が全然なく、根拠となるべきものが何もない。しかし平地に近い立地条件、長方形プランを呈すること、石積みがととのっていることから当古墳群では比較的古い時期のものと考えられる。一方43号墳からは耳環、鉄刀子、鉄釘が出土している。耳環は断面がま



第7図 43号墳出土、耳環、鉄刀子、刀子



第8図 43号墳出土須恵器



(1) 15号填埋场



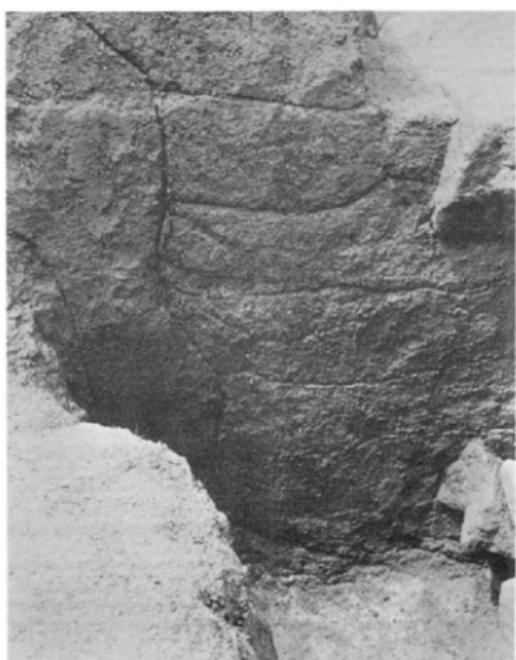
(2) 15号填石室全景



(3) 43号填远景



(4) 43号填石室全景



(5)

15号墳堀り方内上層



(6) 43号墳出土耳環、刀子、鉄釘

るく、中が中空になっているもので形式としては新しいものである。また玄室は方形プランで、小規模であるところから、6世紀末～7世紀初頭の築造と考えられる。この推定は当古墳群出土の須恵器が大部分IV型式のものであるところからもうなづける。

なお、43号墳から鉄釘が出土したことは埋葬時に木棺に入れて葬ったことを示している。

大牟田15号、43号古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第14集  
昭和46年3月31日発行

編集 九州大学文学部考古学研究室  
発行 福岡市教育委員会文化課  
印刷 株式会社 川島弘文社

第三回



福岡市立図書館  
文化課 藏

